

4267

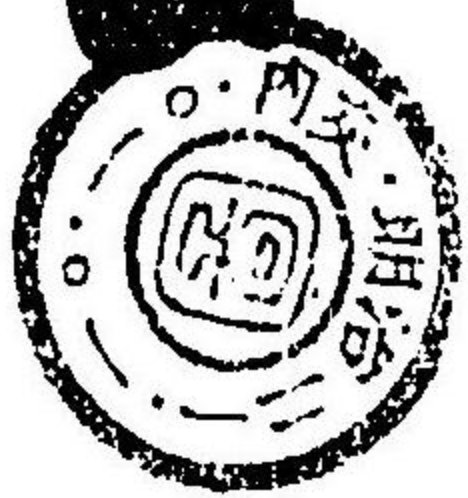
冊 67

418

總演 評劇

樂室毒の如

第二幕



各種新きやうげん
かしのりいりいりいり
片は新しき目録也
楽室毒の如

● 榮 壽

壽々女に由縁の壽座の餘り足取りの善くらねど久し振りの一軒芝居殊に新富座の中立者が長い休業に女房(但し無い者)雁ひの米櫃の立と拜見しての野舞子の酒座も見遊しにのちらぬと見え一同相談會と開たし處何れも同意大賛成忽ち議決なせしより壽座へ出動なしたり元より此度の出動の風雅でもなく洒落でもなし然りとて腕と磨と云ふ高尚な業にもあらを其實最期の開場なりといふ諸風君が御存じなれば止なん／＼内幕の隠れ口借て今回同座開場の三日目より貴顯紳士紳官僧侶農工商藝人社會老若男女東西の見さかひも無き抱子まで馬車人力車で乗り込む騒ぎに茶屋の福徳の百年目一いふ二階不離れへと壽座に座敷へ引き揚て茶煙草堂に其場と待せ若者の我勝に仕切場へ押掛けのあそと掛け合てもアアさう成と仕切場の勢ひ群衆如く手も付けられぬ有様に茶屋の閉口か客の怒る金主の福々俳優の荒雨々々不願の幸候もへ々平氣裕初織の茶煙も解け壽屋の拂ひも漸やく清と咽元過て熱さと忘るゝ魂もあるの何じろ目出たし此幸はひと外への遣らじと次狂言の勉強が肝腎じやく

東西トザイ東と西アと一い座高うのムリ升れと御免な察りまして不辨舌なる口上と以て申し上り壽々女の備着客諸君の御意に叶ひ客月發刊の折から第二号の御約束多くまだ發兌ぬうとの御催促の耳に婿の入る程にムリ升が何分諸座休業の折柄餘儀なく今日迄迄々々に相成り次第就まして壽座開場に付早々其評言を御覽に入升依て前号千歳座二番目狂言の評の餘り古びましたればお願と致し升又た當号より新狂言の筋書と記載升るお約束の處第三号より演劇博士の袖阿彌氏が面白き筋書と送らるれば仰せ合され御覽の上御高評を願ひ奉り升其爲口上左様

菊月末の日

うづら述る

樂室壽々女第二號

● 壽座九月狂言評

● 第一番目

壽と云ふ座名に因む壽永の春の勝間と歌舞伎に輝く陣扇の日の丸

一 谷嫩軍記 第二段目迄

一の谷組討の場

(荒次郎)熊ヶ谷次郎直實 格腹と云ひ拵打に至るまで少しも申し分の無けれど何分上野動物園の熊ヶ谷と云ひたゝい處があつて脇の下か汗が出ました「是れ大人のせいだせう」陣門へ切り入る處の別段の評の無かつたが敦盛と組敷しより何う豚の輕業と見るやうな處もありスカスカ鼻と鳴して泣梅の芋畑へ飛込だ猪かとも疑はれ實に氣の毒ながら動物の縁の離れぬ熊ヶ谷殊に聞き苦しかつ

この敦盛卿と云ふ臺詞の始終「敦もい卿」と云つたの舌の廻やあつていり然し長い間泣通したの感心體格の能いせいでせうと思はる

(左喜之丞)玉織姫 フハリと出て猪ツ尻り立廻つて殺されたばかり

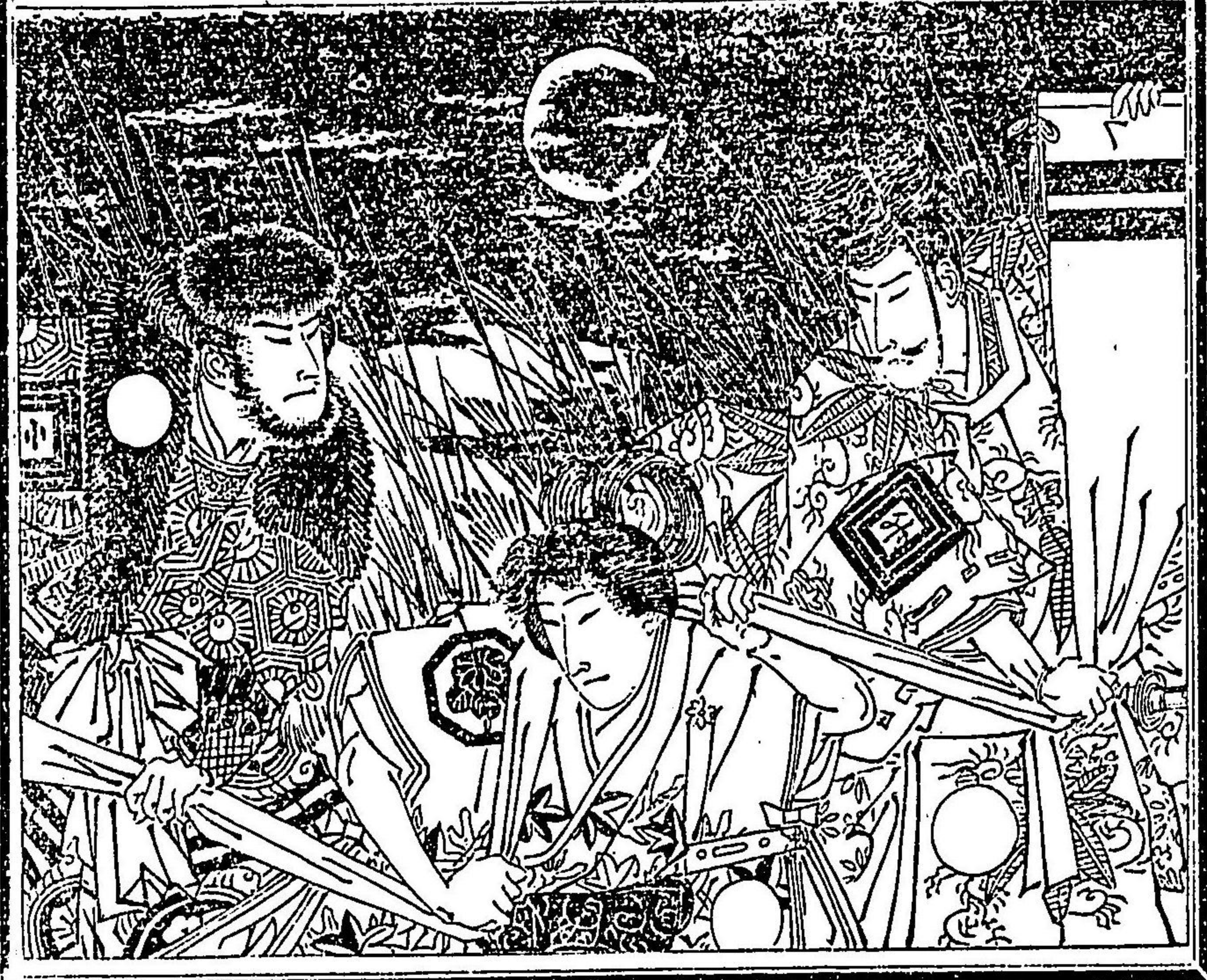
(團八)平山泉季 誰が演ても譽人の無い否な役でお負に爰々と云ふ當り場の無い不感心不愉快極まる役なる可成に演つて退たの有弊に腕達者だけある

(鶴松)直實一子小次郎 平山に抜がけして敵の陣門に近付き唱歌の優なるを聞き勇氣とくちさしこなし中々出来たり殊に品格も能く熊ヶ谷小次郎との充分見受たりしが平山との問答の前何となく女じみた處あり注意すべし勉強次第で遠からせ出世するに疑がひあし、無官大夫敦盛以前の平次郎と異り品格も落仕業も餘程劣りたりと評者ばかりにあらせ客一同の眼も同じ

熊ヶ谷陣屋の場

(荒次郎) 熊ヶ谷次郎直實 鬘をまさかりに似たら岩永で
 わらふとの可愛想に一體熊ヶ谷に限らむ向の役にても
 と替れば似寄りの役のあるもの然し物語りの物當りのや
 うで餘程苦しうであつて看客もハラ／＼做て見て居た
 やうな煎梅ありしと、剃髪してうづの布袋の水出しとい
 味の評最一步進んで云は、食もたれの西行とも云ふべき
 う何の兎もあれ大役にめげを隠せせ車輪に勤める度胸こ
 そ感心なれ天晴々々荒熊天晴

(升若) 直實妻相摸 適當役也を申し分なき筈なれどさ
 うばかりも行ぬものと見え藤の方にまみえ致盛と討たの
 夫直實と知り驚きたるこそし餘り騒ぎ過ぎて感服仕つら
 ざりしが夫より追々善くあつて来て首實檢の折りなどい
 騒がせ寂まを派出過を演つて退た腕前には並居る看客も
 感じ入りしと見え一時の満場水と打し如く静まりかへつ
 て見えたりとゆそ増長するかも知れないから一寸釘と
 一本進上しやう外でもない臺詞に贅六が残つて居て聞き



れは演る方も張合がなからふが見る方も氣がない依て評
 者何ともゆさねと先づ上出来

● 中 幕

廓の俄の全盛に親の老舗の面影と寫すおのぶが片言に
 つながる宮城野惣六が洲崎にゆらぬ新羅の突出し

御存白石噺 大黒屋の場

(升若) 傾城宮城野 誰が何と云はふとも斯云ふ役と當た
 ら決して他に譲らぬ等と一人承知の影ふみの中らせと
 雖も遠くあるまいと思ひの外なる宮城野の不出來道理
 衣装も餘程鹿末で有りつたが夫に拘りらせこそしも鹿
 末とすしたとお腹と立れ亦常に似合ぬ事ゆゑ歎息の餘
 が入らざる言をすすもの他人と思へば物ずさ氣と入
 れ給へ一心にあり給へ

(小圓次) 遊女宮芝 面白可笑い達者だエライ上々吉不
 思議モット澤山見たいや

苦しいから早く直すべし

(橋次) 堤の軍次 中々よく演て居升惜いかな此人の長く
 此世に居られぬ人なりと或る醫師の云ひしが相成べく
 醫師の言葉に違ひあるやう做てやりたものあり

(萬三郎) 御臺藤の方 此役の譯もない役のやうなれど相
 人が善と矢張場隠れのするものと見え此人の善悪の倍置
 き油の切れし機械人形と云ふの外なし

(門藏) 石屋の彌陀六 随分無理な當役あれど常々車輪な
 人もゑさして見劣りのあるまじ一善のあるまいがと思ひ
 しに否早驚いた事に態どドラ聲を包み異に氣取て演り
 し爲め臺詞の尻がさく何と云つて居る事やら徹頭徹尾少
 しも分る共調子にくくられてや仕業も常よりの餘程見
 劣りたり眞逆菅原のお勞れもゑてもあるまいとの内幕

(小圓次) 九郎判官義經 此役の假令關洲が熊ヶ谷を演や
 うとも此役が家橋と云ふ處なれば決して悪い筈のまいが
 一體是のと云ふ程の仕業のない唯熊ヶ谷への御馳走役な



(門藏)大黒屋惣六 此優の事だのら拵らへ萬端其上車輪
 だのらソツの無い筈だが大役と擔ぎ込だと云ふ神經があ
 るので何も小さくなつてヒスハツて賣残りの蜜柑と云ふ
 形で露氣がないのら嘆しい矢張加減と倣きに手一ぱい働
 らいたら反つて見宜からふ物のためしだのら演つて見あ
 さい遠慮なしに

(小團次)與茂作娘かのふ 拵へも否に疑せあり來りて行
 たの感心此役の先年上方で演つたさうだが此優にして此
 腕ありとの評者今日唯今まで存せざりしが濟ぬ譯がら實
 に加役博士ともすさうの此優元來舞臺が寂しいと云ふ評
 のあるの如何なる譯にやと評者熟々見せしになるはどな
 るはど寂しき譯此優の癖として狂言中聊かも暇ゆれば看
 客の方と亂々々々見廻すが十八番なり依て氣の遣入ぬ場
 の多ければ自然舞臺が陰氣になりしも此揚屋の場での餘
 處見處か後見の方さへ見ざれば善き上にも善く見せしも
 のの何にせよ爰が賣出し此圖と外さ身と入れ給へ評者

市原野開闢の場

今一言を無理に田舎言葉と遣ひ場當りと好む此役の
 本分に違へば本文の外に注意あるべし

(升若)源の頼光 今度の芝居の如何ある譯か又何した表
 裏か誰も彼も本役よりの加役に餘程見處あり「何やら鯉
 の荒でも買やうだ」此頼光などの人品と云ひ骨格と云ひ
 頼光の斯であつたらふと思はれ眼を皿として見物したり
 夫に根が上種もろドツシリして善し又探りも宜附た

(鶴松)市原野鬼童丸 氣込も宜し姿も宜し何にも宜し彼
 も宜し今が腕の磨所増長しづに勉強が肝腎

(小團次)袴垂保輔 かのふに比較べ天地雲泥の相違よて
 保輔との思ひも寄らぬ誰が見ても獵人の保右衛門が頼光
 と狼とでも見違へて後を追來りし物としか思はれを一体
 全体此優の品の無い方でもなきに此保輔に限り賤しく見
 えしの如何なものか若や保輔と並の野武士なりと思ひ違
 へて演じのせぬ真逆よ小團次の左様なこともあるま

樂室花誌

い無いとすれば不審晴走諸君よ諸君看官諸君さして其如
 何なる原因を知り玉は、本優の爲め投書ゆれりし

●紀念碑と名弘め 東洋のセキスピヤとも稱すべき淨瑠
 理作者近松門左衛門翁の本年の調度百七十年に相當に依
 り其の血統なる惟原某氏が今度近松門左衛門の名と繼ぎ
 近日江東の某樓よて紀念碑建立追善會に併して二世嗣名
 の披露とせる由にて此程諸社へ近附に廻りしと聞さしガ
 名家の再興と共に二世近松氏が伎倆と顯はさるゝとの筆
 硯を以て世を渡る者の共に賀すべき事なりける

●由次郎と源平 近年か山で肩と比ぶる者のなかりし淨
 村田之助「曙山」の遺子澤村由次郎と助高屋高助の遺子當
 時吾毒座の大達者共癖子役だが、澤村源平の兩優の此程
 諸新聞に二世近松氏の披露ありしと見て豫て親々の物語
 りに近松門左衛門の淨瑠理作者中第一等の人ありと聞及

び居たるが今其二世の先生が出来しとあるに知らぬ顔して居るべきと兩人云ひ合せ訥子に依頼何卒近松氏に面會し庭開の當日鈍き業ながら古先生の位牌に向ひ一ト舞供へ度しとの事に訥子も兩人の心中と察し其由と帳元の山下氏に語りしに同氏の委細承知し大又爺をして阿部川町なる後藤荒御乾兄に云ひ入れしに夫ア感心だと近松氏に告ると氏の深く兩人を賞賛し然らば不及ながら何う作らん开を踊り給はれとの事に兩人の大喜び其新作の出来すと首を伸して待居る由

●久保田彦作氏 狂言作者河竹默阿彌翁の門人に去る者ありと知られたる久保田彦作氏の從來長らく歌舞伎新報の記者中大關にてありしが此程突然同社を辞したりと聞きぬ或る人の説に今度福地氏の發起になる改良演劇歌舞伎座の事より何の紛紜の生じ爲に氏に辞したりとか

●改良演劇の噂さ 「聞いたか」「聞いたぞ」「時に別蔵お主人何を聞いたかとか云やるさ」「サア外の事でも

あい像て湖々附さのわつゝ改良演劇が彌々始まる事にあつたのと聞いたりと云ふ事サ「聞いたともく其ことなら能く聞き知つて居るが彼の離妓おらせ(イヤ違ッ)博士と評判の高い福地源一郎の御前が御本業お廢止と成た處から包み隠して置し彼の改良一件を世間へ沖と知らしめお直筆の標杭とハッ建て歌舞伎座の是でふいと御披露とされたまで委しくチャインと知つて居るのの不思議だらう「あア一程程驚い私やア又福地の殿様が改良演劇と起すと云ふ事丈け聞いたんだが標杭を建てた事ハ少しも知らなかつたが一体場所の何處なんだ」「是やア驚い芝居道で飯を喰て居ながら歌舞伎座の場所を知らぬへとい大變者だぜ」「夫でも知らぬへあふ做方だね」「ソレ何サ木挽町三丁目サ」「ム、彼の原か何處の草がないから長持のゆるめへ千束村にすれば宜のに」「ナセ」「夫でもかいりやうの田圃に限るらふと或る芝居の三階で

●菊五郎の讀賣 今度中村座で菊五郎と始め樂室一同が

幕外へ出てサア御覽じろ是のいれ盤梯山噴火の次第と讀賣の扮打にて見物へ番番附と撒くと云ふ面白可笑き趣向と出すさうぞ

●駒三郎團洲の門に入る 春木座の俳優中女ころしと評判の高い市川駒三郎の今度團洲の門に入り市川宗三郎と改名し播磨屋の家号も成田屋と改めし上是迄深く御愛顧と給はりし方ありとも(但し婦女子に限る)お座敷の一切謝絶し藝道にのみ心と入るとい感心然しさう味く行か

●芝居社會の内幕 此程福地源一郎氏が發起なる歌舞伎座の許可なりしより新富、千歳、中村、市村の四座聯合和齋して四十郎菊五郎其他上等の俳優數名と四座替るべく出動せしめ外座への出稼と一切止む等の計畫と爲したりとの風説ありしが開の四座の者が止めたるより非ずして俳優自ら出動と謝絶するの内約と結びたるものありと如何となれば總て俳優の教育の文學を二の次とし歌舞管

並と第一と爲すと以て團洲菊五郎と云へども決して博學多才といふべからせ失敬ながら無學文盲の御親類とヤしても可あらん歟然し博學多才の大博士も遠く及ばざる所あり(技藝の置て)義心の一事なり守田勘彌氏始め俳優として多くの金と抛お前又限ると云ふやうさ言と吐(横着だから)手の者にして育しより後守田氏の爲めに多くの借財と撥込し俳優も又多くあれど其俳優にして守田氏を恨る者の稀なりとか然るに守田氏の失敗のみ打續き薄ドロの鳴り物にて妖術を用ひし事も數度なり斯る有様なれば守田氏と云へば負債博士なりとて金方の身震ひして近寄る者なし近寄るの皆取り方のと然れども俳優の前貸の一錢たりとも返済と促す事なきの守田氏の名物と云はんか將商法上手と云さうか爲め俳優も義理と金鉄の如くし是迄長の休業中と雖も守田氏へ無断にて他座へ出動せし事いなりしと云へり依て今回歌舞伎座より團洲へ出動と云し返しも團洲頭と左右にし何のつかもねへど

も云ふまひが御免候へたはいくとう何とか宜しくお断
 はりと述たりと夫より四座聯合に際し俳優の益々約と堅
 くし外座へ出勤を爲さる由なれば歌舞伎座の俳優に聞
 へを生じいせぬかなれども發起者が福地氏なれば左様お
 憂ひの決してあるまひ必きないの受合なり又聞く同座に
 ての大坂より中村宗十郎、中村雁次郎の兩優と呼び寄せ
 んど迎ひの者と出せしどの事なるが雁次郎の知らせ宗十
 郎の守田氏に義理もあれば一應にて承諾のせまじと云
 へど是も阿彌陀の光り次第で何なるものか分らざれど記
 者の斯るギチ／＼做た事の大嫌ひ願ひの諸座和熱の日
 と待ち面白き狂言と看て悪まれ口を叩き度のが病ひのみ
 ●千歳座 同座の秋狂言の新富座で演る積りの宮本と油
 坊主、矢矧、滑替俄等とそっくり其儘演る事となりし豫
 て諸新聞に記載有りしが其名題役割の第一番目「二刀額
 面棒宮本」三幕中幕「油坊主闇夜黒染」一幕二番目「矢矧
 日吉月弓張」二幕大切り浄瑠璃「滑替俄安宅新關」役割の

宮本無三四、平の忠盛、野武士津島大五郎、安國寺東現、稻
 田大炊盛貞、武藏坊弁慶、彫物師五斗兵衛(左團次)野武士
 長坂半之丞、天川屋の丁稚伊吾、澤井の下部助平(小團次)
 白倉の娘糸とぎ、杉酒屋の娘おまわ(源之助)白倉の門弟
 多山源藏、番卒關内、馬士富田の八助(門藏)白倉の妻岡之
 谷、須の股連平、番卒丸藏太(荒次郎)白倉の門弟杉森大八
 野武士東條珠數八、庄屋斧右衛門(團八)殿の女月の輪實
 の熊の精(鶴松)野武士日比野六木夫、横山太郎、猿廻し與
 次郎(家橋)野武士中島七郎、おんま目九郎、新問八(鶴
 藏)白倉の門弟森越右衛門、野武士青山新八、浪人豊野
 與左衛門(八百藏)殿の女月の輪、野武士夏森繁藏、替女朝
 がは(壽三郎)彌助猿之助、木下藤吉郎高吉、座頭徳市
 赤蛙屋徳兵衛、神職水江清成(菊五郎)侍女よし野、岸柳の
 妹江島、白倉の下女およし(歌女之丞)白倉の門弟山口但
 島、野武士瀧口兵藏、木下の臣高野新吾、鶴五郎(白倉の門
 弟軍兵衛)野武士牛立毛六、神職鈴森左司馬(喜知六)橋小

明治三十二年三月

島之助、侍女紅葉(金太郎)蓮葉の女房おなみ、尾上の召仕
 おとつ(升若)野武士壁江穴丸、駿河藤九郎惟之、今川の問
 者藤九郎(松助)木曾の牧童岩力丸(ぼたん)白倉源吾右衛
 門、笠原随翁軒、油坊主雷玄、蓮葉與六、關守富樫左衛門
 (團十郎)等よて此程番附になり當る二十八日午後一時よ
 り開場
 ●正誤 先月發兌の樂室壽々女第一號「壽々女發刊の口
 條」と題せし項中第一行目「腦」とら(「腦」とやら)又「樂室
 壽々女の幕明」と題する雪適合かをる氏の祝詞中第三三
 行目より廿四行目に亘る「湖」の「下」相方とある「鳴
 り物」の誤り

寄書

歌舞伎の改良

雪適合かゝる

動く計が能ならば角兵衛獅子を見るがよし動くぬ丈にて
 妙とせば石地蔵でも事済むべし別に面倒な俳優や手数な

衣装と要するも及ばぬ事なり夫を角兵衛や石地蔵で問
 ん合ぬといふの動く時より屹度動き、動かぬ處の植杆
 でも動かぬ旨の權衡と取らねばならぬららるの事で、盲目
 滅法界又はね廻り腹を見せる處まで小刀細工でやる様で
 の肝腎な筋も通らぬ人形踊と甲乙なからん昔うら技の利
 いた俳優でも餘り手足の動作よばかり氣を入れて風采堂
 堂といふ様な處が軽く勝ちなるも随分之なきにあら
 ぞと思はる況して其狂言の作としても第一番に色事が濃過
 る第二番に残酷らしさ背過る、此二ツの今の西洋家ガ
 頭おなしと敵き附ける處の缺點で、未だ此上に日本の狂
 言種子の世界が狭い都合三ツの吾輩も改良を要する筋と
 存せる西洋家が改良論を唱へ出したの如何にも其謂れ
 あることなり併しなから今の有り振れた改良論といふの
 の兎月に改良の穿き違ひが多く飽氣と見ての狼狽だとい
 ひ血氣と見ての殘忍だといひ只無暗に飽もなく波瀾もな
 く理屈ッばい計で徹頭徹尾メシ場の持ち切り、大學の講

釋人形といふ様な狂言をのみ恐れがり演劇狂言の本筋と離れて腹と屏風の蔭とで藝とするが開化と心得る方もありとかや其改良の方案といへば西洋風にせよとの事なり曰く男と女の痴情を寫し舞臺でイチャツキ合ふの卑陋きや演劇の美術である西と東の差異のあれども男女の情と寫さぬ國があるべきを予輩の色氣も亦狂言に肝要な一つの種子だと思ふなり曰く切ツさり打ツさりの野蠻なりと西洋で一人と切り人を殺す殺伐な狂言とすることなきや兎角も切るの殺すのといふ殘い事が世の中にあればこそ思ひぬ關係が出来して種々の波瀾と起すもの故予輩の殺すも亦狂言の好い種子だと思ふなり然れば今で此話らぬ改良を放つて置いて日本とばるを持ち堪へ其艶と波瀾と消さぬ様心かけるが肝要かと思はれるテ就て其保存の次第と改良の調合との事、追々とお話しし、いさすとして演劇好の方々と共に何うう未長う面白い演劇と

見たいものであゝるのあ
〔以下次號〕

活版印刷廣告

敝舍儀是れまで左記の所、於て活版印刷業仕來り候處、遠近各位の發願、以て日増に盛大に相成り、一層、邊、勵、任、器、標、依、て、這、回、御、禮、の、爲、め、從、前、より、歐、文、の、三、活、字、も、御、好、み、又、任、せ、精、良、の、紙、質、と、價、値、速、く、印、刷、調、進、任、候、間、書、籍、定、期、雜、誌、林、券、切、符、商、標、燻、紙、表、簿、記、野、紙、封、皮、名、刺、受、取、證、規、則、書、藥、能、書、廣、告、各、種、色、刷、等、多、少、又、拘、ら、せ、何、卒、御、注、文、被、成、降、候、儀、樣、幾、重、も、奉、希、上、候、拜、首、一、丁、區、新、小、川、町、一、番、地、

文迺舍活版所

●樂宰壽々女定價○一册金三錢○十册前金貳拾六錢○二十册前金四拾八錢○三十册前金七拾錢○府外ハ一册ニ付遞送料金壹錢ツ、申受候○郵便爲替ハ牛込區通寺町郵便局宛ニテ御取組被成降度候也

明治廿一年九月卅日印刷
明治廿一年十月三日出版

著作兼發行者 安島金之助
東京府士族 東京小石川區大門町四番地

印刷者 田中甚兵衛
東京府平民 東京小石川區御徒町三番地

發行所 東京牛込區新小川町一丁目一番地
文迺舍書房